

## アンコール遺跡の破壊と首なし神仏像 村人の宝探し

石澤良昭（上智大学教授）

遺跡の破壊は盗掘によるものが多い。心無い村人やそれを後ろで糸引くコレクターは、仏面や浮彫りをノミで引き剥がし、地下組織に売却するのである。最近では 2003 年 3 月 4 日にプノンクレーンの河川敷遺跡クバル・スピアンでヴィシュヌ神像がノミで削り取られ、無残な穴をあけている。ガードマンが休みを取った日を狙っており、どうも関係者の誰かの犯行であると噂されている。



日本では木彫仏像の腹部に経典が内蔵されていることがある。東南アジアの上座仏教国ではエメラルド製の仏像が本尊として内陣に安置されており、多くの篤信者がその前で額ずいている。それから多くの木彫の仏像の目には宝玉が埋め込まれていたりしている。このエメラルド仏は篤信的な国王が威信をかけて造像させたものであり、それが戦争においては戦利品ともなっている。

こうした聖なる彫像の装身具として寄進者が最も高い価値のある碧玉や宝玉を寄進し、両眼や手足の部位、宝冠の飾りとしてつけられ、それが寄進者の功德とされている。このように、東南アジアでは神像や仏像に宝玉を埋め込むという習慣があった。清らかで尊い仏像に対して世俗の価値の高い宝玉を埋め込むことで、さらに荘厳さが増幅されると考えられていた。



美術館ではよく手足や頭部がない神像が展示されているが、手足がなくともそれなりの美術的な深みと価値が増幅されており、トルソーだけでも感銘を受けることがある。どうして手足がないのか。特に石像の場合、肩の付け根から伸びる腕多手は、その重さから長い年月にのうちに落下してしまう。それに宝冠などで飾り立てた首も頭部の重量に耐えかねて、どこかにぶつかったりすると、少し力を加えるだけで損壊したり落下したりしてしまう。

また、寺院の中に安置されているその彫像の体内にも金製の小円板や宝玉類が埋め込まれていたと思われる。アンコール王朝が崩壊した後で、貧しい村人たちがそれら貴金属を探し出そうとして仏像の手足を壊したことがあった。だから首・手足のない仏像が多いのである。

また同時に仏頭や神像尊顔はそれだけで売ることができ、貧しい村人は金のためにあえて壊すことがあった。



それと同時に村人たちの間には昔から寺院や遺跡には金銀財宝が埋められているという噂が伝わっていた。一攫千金を夢見る村人は、寺院を掘り返し、結果として貴重な文化遺産を破壊してしまった。確かに大寺院の中央塔の下には寺院の鎮めもの（地鎮祭の時に地中に貴金属・剣・宝玉などを入れた壺）が埋まっていた。1934年、アンコール・ワットの中央塔を掘ったフランス人建築家のトゥルーヴェは、もとの地表から2メートル掘り下げたところで金製の小円盤を見つけた。また同年バイヨン寺院の中央塔を掘ったところ、そこに破壊された3メートル近い高さの大仏が発見された。このように、金銀財宝の話はいつも増幅されて村々へ伝聞されていく。

それから19世紀になってからであるが、遺跡の近くに住む村人は意図的に石の壁や塀を壊していた。その理由は、大寺院や中規模寺院の高塔や高壁を造る場合、ブロック状の石材を積み木のように積んでいくが、壁の角のところには石材と石材が離れないように鉄材で作った30～50cmぐらいの千切を両石材に渡し込んである。石材の表面に2cmほどを彫り込み、埋めるようにして両石材をつないでいくのである。この鉄製千切はアンコール・ワットの解体修復時に数千筒の千切が出てきて、新しい千切と取り替えたフランス極東学院は記録している。実はこの良質な鉄材は村人にとって貴重な道具製作の原材料となるのである。ふいごでその鉄材を溶かし、農機具や牛車の車輪への貼り付け、武器、日用道具などに作り変え使用しているのである。

最近も遠隔地の大寺院ではこうした鉄材を探して寺院の破壊が行なわれている現実もある。

(2003年4月14日)